

次に、近代主義を考える場合避けられない「個」の問題。形式としての「個」でなくその内実。陳独秀の思想が社会に対し外在的であったことは、彼の「個」が形式としての「個」であったことを示しているのではあるまいか。

(1983年5月刊, 四六判, 272頁, 960円)

—〈書 評〉—

大形孝平編 『日中戦争とインド医療使節団』
(三省堂刊)

(愛知大学教授) 幼方直吉

日中戦争中、インド国民会議派から中国におくられたインド医療使節団、とくにその1人で華北戦線で殉職したコートニスに焦点をあて、その国際的な歴史的意义を追求したのが本書である。コートニスは中国ではカナダのベチューンとならんで、中国人民を援助した外国人医師として高く評価されているが、日本ではほとんど知られず、本書による紹介が、まとまったものとして最初であろう。

カナダのベチューンについては、古くは周而復の『ベチューン』(邦訳あり)があり、とくに最近、スチュアート『医師ベチューンの一生』(阪谷芳直訳、岩波現代選書、1978年刊)がある。ことに後者はラジカルな民主主義者たるベチューンの生涯をその欠点とともに鋭くえがいた好著としてひろく読まれ、ベチューンの名を日本人の間に普及させた文献であろう。

これに反し、インドのコートニスは上述のように、ほとんど知られず今日にいたっている。しかし中国では最近、つぎのような集会がもたれた。

1982年12月15日、北京の人民大会堂で、抗日战争中のインド医療使節団のメンバーであったコートニス死去40周年、および同じくアタル(団長)死去25周年を記念して、3000人が参加した盛大な集会がもたれた。中国人民対外友好協会長王炳南がこ

の2人の国際主義者の精神と行為を学ぶとともに、それが今日の中印友好事業につながると、あいさつした。同集会には、医療団唯一の生存者バスー医師のひきいる全インド・コートニス医師記念委員会代表団、およびコートニスの親類なども出席した。また12月上旬には、コートニスが初代院長をつとめたベチューン国際平和病院、および彼が外科教師を担当したベチューン医大とも、それぞれ記念行事を行い、また人民出版社から『コートニス記念』が刊行され、映画「コートニス医師」が封切られたという。(『北京周報』1982年12月28日, 52号, 7—8頁)

ところで本書の内容は、つぎの通りである。

- 第1部 帰らぬ1人——インド訪中医療使節団の物語 クワジャー・アフマド・アッバース
- 第2部 インド医療使節団の回想 B.K. バスー
- 第3部 コートニスと戦後中印友好の歩み

高橋満・大形孝平

となっている。

第1部、アッバースの文章の題名「帰らぬ1人」とは、コートニスをさしている。彼は訪中使節団(5名)中、最年少であった。まず使節団結成の過程からはじまり、インド国内の広汎な支持のもとに一行は1938年に出発し、上海、重慶につき、さまざまな障害をのりこえて、華北戦線の医療活動に入ってゆく。そして彼は、1人のこり最後までふみとどまって、初代のベチューン国際平和病院長、華北戦線の医療活動の総責任者となった。1941年11月、同僚の看護学教員郭慶蘭と結婚し一児を得たが、1942年末過労のため死去した。

この時期における彼の言動は、ベチューンとは別の感動的なエピソードが多く残されている。彼が延安への途中、上海にいたとき受取ったインドからの便りに、父の死を告げる家族からの知らせがあった。彼の父はショーラーブルの紡績工場の事務員であり、コートニスをボンベイの医学校に5カ年学ばせるために、多額の借金をし、彼の卒

業後開業して、この借金をかえせると期待していた。

ところが息子コートニス、使節団とともに中国に行くことを決意した。父はわが子の志を察し、その行動をとめなかった。彼の出発後、家計は絶望的状态になり、ついに父は自殺した。この悲しいニュースを知った使節団の人々は、彼に帰国をすすめた。それにたいし彼は、つぎのように答えた。

「私は帰らない。国民会議派が私を派遣し、われわれは全員少なくとも1年はもどらないことを誓約したはずだ。父がこのような最大の犠牲を払った以上、私のなすべきことは、父が何にもまして価値あるものとした大義のために、私自身の命を捧げることしかない」(77頁)

彼のこの決意は、同じ国際主義者といわれながら、ラジカル民主主義者であったベチューンがスペイン内乱の参加を打切り、未知の中国にむかうとき、カナダの人たちを驚かせた個性的な行動とはニュアンスが異なっている。コートニスの場合の大義とはやはり、1930年代のインド・中国の民族解放運動の意味とみるべきではなかろうか。彼はその後、華北戦線で民衆のための医療活動に従事し、他の4人の同僚と異なり、永遠に母国インドに「帰らぬ1人」となったのである。

この華北戦線の時期、中国人同僚のコートニスにたいする印象を、江一真（元衛生部長）が「国際主義者コートニスとの日び」（『北京周報』1982年12月14日、50号）にリアルにえがいている。

コートニスが死んだのは、1942年12月9日であった。その後の事情について江一真は、つぎのようにのべている。

「翌43年の春、敵の砲声のとどろくなかで、われわれは大衆とともにベチューンの墓の左側にコートニスの陵を築いた。並んだ陵を前にして、私は40年6月21日のことを思い出していた。当時はここにはもちろん、ベチューンの陵しかな

かった。その前で、コートニスはおごそかに言ったのだ。『私はあなたのように生きます』と。いま、私が誓う番がきた。『コートニス君、われわれは君のように生きます』。」

ちなみに本書第3部に紹介されている石家荘市のベチューン、コートニスの墓は、これが改葬されたものであろう。

第2部は、1980年、使節団の唯一の生存者であるバスーが訪中の途中、日本に立寄ったときの講演である。バスーは使節団のうち、コートニスとともに華北戦線で活動し、コートニスの死後1943年、インドに帰国した。彼は使節団のうち最もよくコートニスを知る同志である。したがって、このコートニス回想は事実関係では、第1部と重複する部分もあるが、それとは別のニュアンスの、風格のある内容である。

第3部で興味のあるのは、本書の編者大形孝平氏が1981年4月に、石家荘にコートニスの墓を訪ねた記録である。

コートニスの墓は石家荘市の西部、烈士陵园のなかにベチューンの墓とならんである。その写真は日本ではじめて紹介されたものであろう。

また同じく石家荘市内のベチューン国際和平医院の構内に、ベチューンとコートニスの2つの記念館がある。このコートニス記念館は1976年に完成し、彼の白色の胸像がおかれ、その背後に毛沢東の弔辞がパネルに大きくかかっている。なおコートニスの死の翌年、周恩来の彼の遺族にたいする手紙（1943年3月22日、重慶、『新華日報』）が邦訳紹介（210頁）されており、これは中国のコートニス評価を最も正確にのべたものといえよう。

最後に第3部で、第2次大戦後、インドで報道された全インド・コートニス記念委員会についてのべている。第2次大戦後の中印関係はさまざまな経過をたどるが、そのなかでこのコートニス委員会は両国の友好関係のシンボルとして、今日なお活

動していることが紹介されている。

もし云うならば、コートニス委員会自体の組織ないし活動の具体的内容（刊行物など）についても併せて紹介されることが望ましかった。なぜならば本書の読者の1人としては現在におけるインド民衆のコートニスにたいする評価がどのようなものであるかを具体的に知りたいからである。

以上のべたような本書に紹介されているコートニスを現在、われわれが知る場合、ただ中国側の評価にそのままよりかかるだけでは、あまりにも一面的ではなかろうか。この問題を日本の戦後責任のなかでとらえ直せば、別の視野が出てくると思われる。それはベチューンやコートニス、華北戦線で殉職した時期、在中国の日本人医師はなにをしていたかを改めて考え直したらどうなるであろうか。かかる場合、最初に気付くのは旧満州関東軍731部隊の行動を想起せざるをえない。この731部隊の行為はすでに1981年、森村誠一の記録刊行（『悪魔の飽食』）によって明らかなので、とくにくり返すまでもない。

同じ医師の戦時中の活動とはいえ、科学者の社会的責任という視点からみれば、ベチューン、コートニスの医学と731部隊の医学は中国民衆にと

って全く正反対に機能していたのである。この点をどのように学ぶべきかが、今日の課題であろう。

それにもかかわらず、同じ時期の日本人医師のなかに、自己の医学を民衆のためにささげるようにかかわってきた人も例外的にいたことも、忘れてはならない。たとえば解放以前のハルピンの満州医科大学教授稗田憲太郎は、その1人であろう。彼は東北解放後、解放軍の医療活動に参加する過程で、多年の蓄積した自己の医学思想の貧困を痛感し、帰国後、自らの体験をもとに『医学思想の貧困』（社会思想社、1971年）という評論集を公表し、のち日本学術会議会員にもなって、自己の主張を日本の医学界に訴えたが、あまり大きな反響はなく終った。詳しくは稗田憲太郎「中国における医学をめぐる——小島麗逸氏との対談——」（『アジア経済』1970年9月号所収）を参照されたい。

かかる日中戦争中の各国の医師のあり方を再検討するなかで、「帰らざる一人」であったインド医師コートニスの生涯を本書から学ぶべきであろう。ベチューンについても同様であろう。

（1982年11月刊、四六判、238頁、1300円）

【編集後記】▶今月号は、中国の社会学について特集を組みました。周知のように、社会学は最近中国において、心理学等と並んで人気のある学科となっています。加々美論文は、その中国社会学を、旧中国期の在り方からさかのぼって論じ、今日における存立可能性を探っています。歴史の荒波をかいぐって、真に有効な自立した学問として生き残るかどうかは、筆者も述べているように、過去の限界に対して真剣な考察をすると同時に、「拾うべきを拾い、捨てるべきを捨てる」科学的精神をもちつづけることにかかっているようです。▶西条論文は、あ

る中国残留日本人孤児の夫婦が日本人になってゆく過程を具体的に、微妙な心理のあやまで鋭く描くことによって、日中両文化圏の相違を非常に興味深く際立たせています。▶去る9月17日、当研究所を訪問された田昌五先生（中国農民戦争史学会会長）との懇談会は、日中双方の研究者が率直に自分の意見を交換しあい、有意義な集いとなりました。今後も、こういう実りある懇談の機会が多くあって欲しいものです。▶最近、月報の書評は充実していると過分にもおほめの言葉をいただきました。▶次号は、中国経済改革に関する特集号の予定です。（U）